

ほっといて下さい1
～従魔とチートライフ
楽しみたい!～

三園七詩

Nanashi Misono



RB

レジナ文庫



シルバ

魔獣フェンリル。
ミツキの従魔で
高度な魔法を自在に操る。
ミツキ命。

シンク

ほう おう
鳳凰の雛。
ミツキに命を救われ、
従魔の契約を結ぶ。

セバス

副ギルドマスター。
美しきナイスミドル。
腹黒で、怒ると
超絶怖い。

ディムロス

ギルドマスター。
強面だが、懐が深く優しい。
ミツキには「じいちゃん」と
呼ばせている。

アルフノーヴァ

セバスの師匠。
齢三百歳を
超えるエルフ。

コジロー

短剣使いの忍者。
ギルドでは、ミツキの
講師を務める。
無口だが愛情深い。

ベイカー

誠実で頼りがいのある
A級冒険者。
ミツキの保護者で、
彼女には常にデレている。

ミヅキ

事故で命を落とし、幼女として
転生してしまった。
無自覚チートを発揮しつつ、
異世界ライフを満喫中。
周囲が過保護すぎるのが悩み。

CHARACTERS

登場人物紹介

目次

ほんといて下さい！
 ～～從魔とチートライフ楽しみたい！！～
 書き下ろし番外編
 必然

ほっといて下さい 1

ゝ 従魔とチートライフ楽しみたい！ゝ

プロローグ

「うーん」

ズキズキする頭の痛みで目が覚めた。

昨日は勤めている会社の歓迎会だった。

本当はまっすぐ家に帰って、ペットの犬の銀と戯れたかったが、会社の上司に無理やり参加させられて、苛立ち、ヤケクソで酒をたらふく飲んでしまった。

クツソー、調子に乗って飲み過ぎた……ううう……どうやって帰ってきたのか全然覚えてない。

「じん、じん？」

いつものように愛犬の銀を呼ぶが、思うように言葉が出ない。伸ばした手に触れる感触もいつもの布団の上ではないようだった。

うん？　なんか変だな、床で寝ちゃったのかな？　地面がなんかいつもと違う。

頭を押さえていた手をゆっくり退けて、目をそおつと開くと……

「は？」

——目の前に広がるのは綺麗な青い空。周りをぐるつと確認すると、木がうつそうと茂っている。

私はいつの間にか森の中にいた。

「は？」

もう一度声を出してみたがやっぱり森だ。

あれ？　ここどこだ？　なんで森なんかで寝てるんだ？　ちよつと落ち着こう！　昨

日のことを思い出そう！

土の上で正座し、目を瞑り考え込む。

確か、もう歩くのもだるかったのでタクシーに乗って、自宅近くのコンビニまでと頼んだはず。そこでいつもの銀のおやつを買って……

「うっ！」

ズキッと頭が痛み出し、頭を抱える。

そうだ……。外に出て、家に向かおうと角を曲がったら……車のライトが眩しくて目を閉じたなあ。

私は痛む頭のことはずっかり忘れ、やってしまった……と天を仰いだ。
あー私……死んだのか。なんかあんまり実感わかないなあ。

キョロキョロともう一度周りを見てみるが、普通の森に見える。

「ここ、てんごく？」

本当の天国など知らないが、もう少しいい場所なんじゃないかと夢を見ていた。雲の上にあったりしてふわふわキラキラの世界なのかなあ……なんて思ってたのに……もう少し周りを見てみると立ち上がろうとして、

「きゃ」

バランスを崩し、おしりからコケてしまう。

あれ？ 上手く立てない。

少し格好悪いが前に体重をかけてゆっくり立ち上がる。……なんか景色が低い？ 地面を見ると小さい足が見える。

「ありえ」

なぜか幼児語が口から出てしまい、パツと口を押さえた。

……えっ、えっ？

軽くパニックになりながら自分の手を広げて見つめる。

「ちいさい……」

これは転生ってやつかなあ……と、軽く現実逃避しながら他人事ひとごとのように思ってしまった。

まあ懂れてたけど、実際なると困ったもんだなあ。

「しゃて、どうするか……」

可愛い幼児の声がぼつんと森に響いた。

一 従魔

銀はどうしてるだろう……

自分の今の状況も不安だが、それよりも愛犬の銀のことが気になる。

私が帰ってこなくて心配してないかなあ。早く誰かに見つけてもらって、保護されているといいんだけど……

銀の心配をしながらとりあえず休めそうところを探し、前に進む。しかし、いくら進んでも景色は一向に変わらない。

どうしよう、どっちに向かえばいいのか全然分らない。ちょっと泣きたくなってきた。幼児の体に反応してか、鼻の頭がツーンとして涙が出そうになる。

ダメだ。泣いたって誰も助けてくれない！ 現実には甘くない、女の涙は全然最強ではないんだ。

私は小さい足を踏ん張って前に歩き出した。

どれくらい歩いただろう。ふとなにかの気配がしてそちらのほうを見てみるが、特になにもなかった。でも、なにか、誰かが呼んでいる気がする。

私は呼ばれている気がする方向に、フラフラと導かれるように歩いていった。

しばらく進んだけれど、疲れて「もう、限界！」と膝をつきそうになる。顔を上げると、少し先の木々の合間に、光が差し込む場所が見えた。

あっ、少し開けた場所がある！

私は力を振り絞って前に進んだ。

「わあーきれーい！」

うつそうと茂る木々の下を抜けると、そこには小さな湖があり、湖畔には色鮮やかな花が咲き誇っていた。最初目覚めた時、ここに寝ていたら天国だと思っただろう。

私はとりあえず湖に近づき、水をすくい上げてパシャッと顔を洗った。

綺麗な水。だけど飲んだらまずいかなあ。でも、喉はカラカラで唾も出ないし……

覚悟を決めて少しだけ口に含むと、冷たい水の甘みが広がった。我慢でさずに少し飲み込んでしまう。

「おいちーい！」

ばあーと笑顔になるほど水は美味しかった！

すっごい飲みやすい水！ 水道水より全然美味いわ！

小さい手に水をすくって更にゴクゴクと飲んでいく。喉が潤ってほっとすると、今度はぐうーっとお腹が鳴った。

「ううう、おなかすいたあー」

水に足をつけ、なにか食べられそうなのはないかと周りをキョロキョロと見回すと、草木で陰になっているところに、なにやら黒っぽい塊があるのに気が付いた。

なんだろ……。なぜか妙に気になり怖々と近づいてみる。

「っ！」

私は声が出るのを両手で必死に抑えた。そこには真っ黒な毛並みの、大きな獣が横たわっていたのだ。

犬？ いや、狼？ にはしてはデカイ。あんな大きな動物見たことない。
私は獣に気付かれないようにそおつと後ずさりする。しかしまだ小さい体に慣れていないため、トンツと尻もちをついてしまった。

ヤバイ！ 気付かれる！

私は思わずギユツと目を閉じた……が、なにも起こらない。

恐る恐る目を開けると、黒い獣はその場から動いた気配がなかった。

よかつた、気が付かなかったみたい。

私はほっとして、音を立てないようにハイハイをしながら木の陰に隠れた。そして獣がいなくなるのを待つことにした。

……全然動かない。

しばらく待つてみたが獣は微動だにせず、目を閉じて蹲^{うつすま}ったままだ。

もしかしてもう死んでるのかな？

死体ならちよつと場所を変えてあげようかと思ひ、そつと近づく。触れるほど近くに來たが、獣はやはり動く気配がなかった。

やつぱり死んじやつてるのかな……。可哀想になりその毛並みを優しく撫^なでると、微^{かす}かに手のひらにぬくもりを感じた。

——まだ死んでない！

私は急いで周りに落ちてゐる木の葉などを集めて、獣の体を温めた。小さい体を獣にくつつけて、毛をさする。

頑張^{がん}つて！ 頑張^{がん}つて！ 死んじやダメだよ、と心の中で必死に祈りながら獣を温める。真つ黒い毛並みが愛犬の銀と重なり、泣きそうになるのを必死に堪^{こた}えて、私は「頑張^{がん}れ！ 頑張^{がん}れ！」と声をかけ続けた。

ペロペロとなにかが顔を舐^なめる感覚で目を覚ました。

いつの間にか眠^ねっていたらしい。私の顔を舐^なめているのはおそらく銀だろう。いつも朝はこうして起こしてくれるのだ。

「じん、やめてえ。くしゅぐつたいよ」

クスクス笑ひ、銀を撫^なでながら目を開ける。しかし、目に飛び込んできたのは見慣れた銀ではなく、大きな獣だった。その黒毛は、月の光を浴びてうっすらと銀色に耀^{かがや}いている。

「――」

驚きのあまりビクツと体を硬直させ、瞬時に昨日のことを思い出す。どうやら獣を撫^な

でながら寝てしまったようだ。

このまま食べられちゃうのかな……

ドキドキしながらじっとしていると、獣は尻尾をバタバタと振り、相変わらず丹念に顔を舐めてくる。その姿に愛犬の銀が被った。

そおっと頭を撫でてみるが、嫌がった様子も見せず、むしろ喜んでいるようだ。

「かわいいね」

ニコニコしながら撫でてやる。獣は嬉しげに目を細め、私を大事そうに自分の毛並みの中に引き寄せた。

「ふふふ、くしゅぐつたい」

毛がふわふわで顔や体に当たり心地よい。ギュッと抱きつくと、胸の奥でカチツとにかが引つかかる感じがした。

あれ？　と思いい胸をさすっていた、その時――

【待っていた……】

突然、低い声が頭の中に響いた。

ハッと顔を上げると、獣が優しい金の瞳でこちらをじっと見つめていた。

「いま、あなたがしゃべったの？」

獣は私の言葉を肯定するように尻尾を振り、優しい眼差しを注ぐ。

【お互いに惹かれ合い、俺が認めて従魔の契約をした。だからこうして話すことができるのだ】

訳が分からずポカンとしていると、【嫌だったか……】と耳を垂らし悲しそうな顔をするので、慌てて否定する。

「ちがう、ちがう、いやじゃないよ。びっくりしちゃったの」

そう言うてにっこりと笑いかける。すると、獣は嬉しげに尻尾をバタバタと振った。

なんか尻尾を振るだけで、結構な風圧が出てくる気が……尻尾の周り、葉っぱがなくなってるし。

「ううんと、えっと、じゅうまのけいやくつて……」

うーん、喋りづらいなあ。そう思っていると、頭の中で声が響いた。

【喋りづらかったら、頭の中で話してごらん】
にっこりと笑って獣がこちらを見つめる。

「あたまのなかでしゃべれるの？」

びっくりしたが落ち着いて息を吐き、さっそく試してみる。

【こんにちは】

【……なんで挨拶をする？】
 獣が首を傾げる。

【なんとなく？】

年甲斐もなく、小さく舌を出しておどけてみせると、獣はビシリと硬直してしまった。それほど酷い顔だったのかと思いきや、沈むが、気を取り直して尋ねた。

【えっと、まず名前を聞いてもいいかな？ お話しするのに不便だし……私の名前は美月^{づき}って言うんだけど】

【俺はフェンリル。だがそれは種族の名だ。名前はミヅキがつけてほしい】

獣は、ハツとしてそう言い、凜^{りん}とした姿勢でおすわりをする。その姿まで銀にそっくりだ。

ふいに愛犬の銀を思い出し、目に涙が浮かぶ。すると、フェンリルは慌てて【嫌なら無理にとは……】と、シュンと耳を垂らした。

落ち込んだ様子が可愛らしく、ふふっと笑って頭を撫^なでてやる。

【ごめんね。嫌なわけじゃないんだよ。前に一緒にいた子を思い出してしまって……あなたがその子にあまりにも似てたから、嬉しいような、悲しいような気持ちになってしまったの】

私の言葉に、フェンリルはほっとして表情を和^{やわ}らげた。

【俺に似ているとはどんな奴だったんだ？】

【うーん。一言では言えない大事な家族だった。私がいなくなっても、幸せでいてほしいんだけど……】

ちよっとだけ笑ってフェンリルを見ると、彼は少しだけ悲しげな笑みを浮かべた。

優しい子だな。本当に銀にそっくり。

私は銀を思い浮かべながら、目の前のフェンリルの名前を考える。

【じゃあ、あなたの名前は……シルバ。私の大事な子と同じ色の名前。あなたのその美しい黒い毛並み、月の光を浴びるとキラキラ銀色に耀^{かがや}くから、シルバってどうかかな？】

【俺の名は、シルバ。いい名をありがとう……ミヅキ】
 シルバは嬉しそくに頬を擦^すり寄せた。



なんでこんなことになったんだ……

体が思うように動かせない。

とりあえず安全な場所で体を休めようと、周りの気配を探るが思うようにいかない。フラフラになりながらどうにか進むと、少し開けた場所に水場が見えた。

もう横になりました。俺は草木の陰に体を横たえた。

クソ……なんかモヤモヤする……なにかが足りない！ が、なにか足りないのか分からない。

無性にむしゃくしゃして、気持ちが発散しようと所構わず暴れていたら思わぬ罰を天から与えられ、俺は深い傷を負った。

しかしそんなことはどうでもよかった。もう疲れてしまった。

この満たされぬ思いを抱えたまま生きるのは辛すぎる。このままここで終わろうかと目を閉じていると、不意にフワツという香りが俺を包んだ。次いで、温かく気持ちいいものが体に触れる。

少しずつ傷ついた体の痛みが引いていく……うつすら目を開けると、目の前で幼子^{おとな}が体に張りつき一生懸命俺をさすってくれていた。

この人を俺は知っている……

なぜか懐かしい気持ちがあるが、この幼子^{おとな}に会ったことはないはずだ。しかし、この

幼子^{おとな}が触れるたび、ポツカリ空いていた心の隙間が埋まるような感覚がある。

こちらが見ていることにも気付かず、幼子^{おとな}は瞳に涙を溜めて「頑張れ！ 頑張れ！」と声をかけ優しく体をさすってくれる。

俺はこの人をずっと待っていたのか。ああ、この人を守らねば……

なぜかそんな考えが頭を過る^{よぎ}。

目を再び閉じると心のモヤモヤは消えて、不思議と幸せな気持ちで満たされていた。

しばらくして、ずっと励ましながら、俺を優しく撫^なでていた手の動きが鈍くなり、少しして止まってしまった。

目を開けると、幼子^{おとな}は俺に寄りかかるようにして眠っていた。

自分の体を確認するが、スッキリして痛みもない。

……なにかの回復魔法か？

起こさないようにゆっくり動きながら顔を覗くと、柔らかそうな白い肌、サラサラの黒い髪がかかっている。規則正しく上下する小さい体がやけに愛おしい。

この閉じた瞳はどんな色だろう？ その瞳はなにを映すのか？ 俺を見てどう感じるだろうか？

そんなことを考えながら、しばらく飽きることなく見ていたら、長いまつ毛がピクツと動いた。次いで、眉間にシワが寄る。

シワをなくそうとペロペロと舐めると、幼子はクスクスと笑って「じん、やめてえくしゅぐつたいよ」と俺を撫でてきた。

嬉しい気持ちが抑えられず、更にペロペロ舐める。

次の瞬間、幼子が喉を持ち上げ、待ち望んでいた瞳が現れた。黒く澄んだ瞳が俺を映す。目が合うと、彼女はびっくりしたのか硬直してしまった。

しかし、嬉しさが上回り構わず舐めていると、幼子は恐る恐るこちらに手を伸ばし、また優しく撫でた。

「かわいいね」

可愛い笑顔を向けられ、愛おしさが胸いっぱいになり、思わずその体を抱き寄せる。「ふふふ、くしゅぐつたい」

この笑顔をずっと近くで守っていたい。そう強く思うと、俺と彼女の間で『従魔の契約』がなされた。

従魔の契約では、使役者と従魔の魂が結ばれる。これにより、意思の疎通ができ、従魔は使役者の危機を早く察知したり、力が増大したりする。



しかし、この契約は互いの魂が惹かれ合い、認め合わないと結ぶことはできない。契約がなされた今、幼子も自分を受け入れてくれたと思うと、胸の奥が熱くなった。ずっとこの時を待っていた気がする。

不思議そうに胸をさする幼子に話しかけると、大きい瞳を更に真ん丸にした。

「いま、あなたがしゃべったの？」

たどたどしい喋り方で話しかけてくる。会話できることが凄く嬉しく、ゆっくり頷いた。

お互いに惹かれ合ったので契約ができたこと、それによって会話ができるようになったことを伝えるが反応がない……。望まぬ契約だったのかと寂しく思っていると、

「ちがう、ちがう、いやじゃないよ。びっくりしちゃったの」

幼子は慌てた顔で首を横に振る。その後も拙い言葉で一生懸命に話してくれる。

頭の中で話せると伝えると、今までの拙い言葉ではなくしっかりとした挨拶がかえってきた。

なぜ挨拶……？

不思議に思い聞いてみると、なんとなく可愛く首を傾げ、小さな舌をペロツと出した。あまりの可愛さに思考停止してしまう。これは本格的に守らねば！

まずは結界を張るべきかな、と色々考えていると幼子が話しかけてくる。

幼子の名は『ミヅキ』というらしい。名前を聞くとなぜか懐かしい気持ち溢れる。

この気持ちはなんなんだろう。ずっと昔からミヅキを知っていたような不思議な感覚だ。そして自分の名前も聞かれる。

今までずっと一人でいて、名前など使うことはなく、種族名のフェンリルと呼ばれることがほとんどだった。

どうせならミヅキにつけてほしいと頼むと、ミヅキはうつすらと瞳に涙を溜めてしまった。

泣くほど嫌だったのか……

落ち込む俺に、彼女は笑って優しく頭を撫でながら、泣いてしまった訳を話してくれる。前に一緒にいた子を思い出し泣いてしまったのだと……従魔だろうか？

ミヅキは寂しげに瞳を揺らしながら、大事な家族だったと言った。そして、俺に名前をくれる。

ミヅキの家族だった奴と同じ名の色、そして俺の光に反射して耀く毛並みから『シルバ』と。

れどころか、昔からその名であつたかのように自然と馴染なじんだ。

いい名をありがとう、とミヅキに礼を言う。

そして『銀』。お前の名を受け継ぎ、俺がミヅキを必ず守ると誓おう。

二 魔法

【じゃあ、改めてよろしくね。シルバ！ 従魔の契約だけど、なにかルールとかしてはいけないこととかあるの？】

【まあ細かいことは大丈夫だ。ミヅキに命令されて嫌なことなどないからな。ミヅキは俺の主人だ、なにがあつても必ず守ると誓う】

シルバに聞いてみたら、彼は自信たっぷりに胸を張り答えた。

【うーん、よく分からないけどあんまり無理しないでね。今は一緒にいてくれるだけでも嬉しいよ】

そう言つて笑うと、シルバも嬉しそうに尻尾を振る。

【しかしミヅキは見た目は幼子おさなだが、話すと大人のようだな】

【えっ！ だって私、お酒も飲める大人だもん】

私の言葉に、シルバは小首を傾げる。

【人族の細かな年齢は分からぬが、ミヅキの見た目は赤子みたいだぞ】

そういえば手足が小さくなつていたなあ。水辺に向かい顔を水面に映すと、そこには前世の面影がうつすらある、可愛い女の子が映っていた。

【にやつ！】

びっくりして思わず声が出てしまう。

【なんか大分可愛く補正されてる……年齢も三、四才かなあ。これじゃあ話しづらいわあ……中身と外見が違うけど……シルバ、本当に契約して大丈夫だった？】

シルバが見た目を基準にして契約したのなら、立派な契約違反になっちゃいそう。

【俺はどんな姿のミヅキでも大丈夫だ。ミヅキの見た目ではなく、魂の部分で惹かれてるからな。もちろんその姿も可愛くて好きだがな】

なんてどこぞのイケメンみたいなセリフが飛び出した。

ヤバイ！ 見た目狼なのになにすごいイケメンに見える！ 人だったら間違ひなくもてるだろうな。

キザなことをサラッと言うイケメンフェンリルに頬が少し染まるのを感じながら、あ

りがとうとお礼を言うと、彼は満足そうに頷いていた。

【頭で考えてる分にはスラスラ言葉が出るけど、声に出すと年相応の話し方しかできないみたい】

【その見た目で大人顔負けで話していたら、よからめ輩に目をつけられそうだな。年相応の振る舞いをしたほうがいいだろう】

困ったなあと思っていたが、そう言われなるほどと頷く。と、その時、

「くう」

お腹から可愛い音が響いた。

あゝそう言えばなにも食べてないな。お腹空いた……

色々あってすっかり忘れていたけれど、気が付いてから水しか口にしていない。意識すると余計にお腹が空いてくる。

【ふふ、腹が減ったのか？ 可愛い音だな】

シルバに指摘され、恥ずかしくなり、お腹を押さえて下を向く。すると、鼻先をお腹に近づけて掴まれと言われる。

言われるまま顔にギュッと抱きつくと、ポイツと背に乘せられた。

ふわふわの背は気持ちよくて、思わず頬ずりしてしまう。

【しっかり掴まってるよ】

そう言うときシルバは走り出した。凄く速さなのだろうが振動も、風圧も感じない。横を流れる景色だけがみるみるうち変わっていく。

【全然風を感じないし落ちる気配もないね】

【ミヅキの周りに結界を張っているし、障壁魔法もかけている。それに俺がミヅキを落とすわけないだろう】

「まほー！」

魔法と聞いて思わずテンションが上がる。

【魔法があるの？ シルバは魔法が使えるんだ！ 凄いいねー！】

背中をゴワゴワ撫でながら凄く凄いと褒めると、シルバは嬉しそうに尻尾を振る。

【他の魔法も使えるぞ……見るか？】

【見たい！ 見たい！】

嬉しそうに照れながら聞いてくるシルバに、私は声を弾ませて答える。しばらくして、シルバは小高い崖の上で止まった。

【じゃ、行くぞ！ 風牙斬】

シルバが前脚を振り下ろしながら叫ぶと、突風が鎌鼬のように前にそびえていた森を

扶^えった。

【えっ……え……ええええええー！ なにあれ！ 大分先まで森が挟^{えぐ}られてるよ！ シルバ、なにをしたの！】

【なについてミヅキが見たがった魔法だぞ。今のは風魔法の風牙^{ふうがざん}斬だ。そんなに強くやっ たつもりはなかったが、ミヅキに見せるのに少し張り切ってしまったな！ それとも、 もっと派手なほうがよかったか？】

私はぶんぶんと首を振る。もつと凄^はい魔法もあるんだ……ちよつと怖いな。

とりあえず見せてもらったし、シルバが褒^ほめてほしそうな顔を向けているので思^{おも}いっ きり撫^なで回す。次はもつと抑えてやってねと忘れずに言っておいた。

少し移動して開けた場所を下ろされる。

少しここで待っていると言われたので、そこら辺の石に腰掛け待っていると、シルバ が果物を啜^くえて戻ってきた。

【ミヅキ、この実は美味^{うま}いぞ。食べてみろ】

シルバが持ってきた果実は、見た目が桃みたいだった。

【桃だあ〜】

私は喜んで受け取り、その匂^かいを嗅^かぐ。するとフワツと桃のいい香りがした。

小さい手で皮を剥^むきカブツと頬張った瞬間、ジュワツと桃の果汁が溢れた。

あまりの美味^{おい}しさに夢になり、口いっぱい桃を頬張ってしまう。小さい口の周り は果汁でびちゃびちゃだ。

そんな私を見て、シルバがペロペロと舐^なめて拭き取ってくれた。

【ありがとう！ シルバも一緒に食べよ】

残りの桃を差し出したが、全部食べろと言われる。しかし、小さい体では一つだけ お腹がいっぱいなのだ。

【お腹いっぱいだからシルバが食べて】

ニコツと笑って、もう一度桃を差し出す。シルバは【そうか？】と言って、尻尾をパ タパタさせながら、一口で食べてしまった。腹も膨れたので、今後のことを考える。

【ふー、お腹いっぱい。さてこれからどうすればいいかな？ どっか市とか町とかある のかな？】

【し……はよく分かんが町や村、都もあるぞ。俺はあまり近づかんが……】

【そっか……都とかは面倒そうだから町とか小さいところがいいかな？ ギルドみたい なものあるのかな？ 従魔がいるなら冒険者や勇者もいそうだけど……そうすれば私と 契約してるし、シルバも一緒に行けるよね？】

【ミヅキは本当に大人なのだな……ギルドは確かにある。人族のことはあまり詳しくないが、俺は討伐対象になったから間違いないな】

【討伐！　なんで!】

こんなに優しくてふわふわで可愛いイケメンフェンリルを討伐なんて許せん！　プリンツと怒っていると、シルバが気まずげに顔を逸らした。

なんか銀が悪いことをした時に誤魔化す仕草に似てる。

じつとシルバの顔を見てみると、ペロペロと顔を舐めてきて誤魔化しだした。

またいつかきつちり聞いてみるか……

可愛い仕草に問い詰めるのを諦める。それから、ここにいっても埒が明かないので、とりあえず安全そうな町を目指すことにした。

シルバには軽く前世について話してみたが、あまり気にしていなさそう。ただそれを他の人に話すのはやめておけと言われたので、二人だけの秘密にすることになった。

シルバの案内でよさそうな町を見つけたが、問題はようやく町に入るかだ。

町には門番が立っていて身元を確認されるらしい……見た目は子供、頭脳は大人？　身分証なし！　フェンリル連れ！　怪しき満点！

……絶対入れる気がしない。

シルバはそのまま行けばいいと言うが絶対揉めるよー。フラグ立ちまくりだよ！　揉めたらどうにかするとか言うけど、絶対力技だよな？

さっき見せてもらった魔法を使ったら、町がなくなっちゃいそうだよ……

ふーと思うため息が出る。町から少し離れた場所で作戦会議を開くが、いい案は一向に出ない。今日はとりあえず野宿かなあ、なんて考えていると、シルバがすつくと立ち上がり私を隠すように前足の間に挟んだ。

次の瞬間ガサツと音がして、武装した人達が数人、私達の周りを取り囲んだ。

「おい！　その子、無事か？」

武装したうちの一人が、こちらに向かって叫ぶ。

……私のことだよな？

キョロキョロ周りを見るが、皆の視線が私に集中している。これはなんか勘違いされているような気が……。シルバはシルバで威嚇するような唸り声をあげる。

【シルバ、大丈夫だから唸るのやめて】

とりあえず落ち着かせようと思い、立ち上がってシルバの隣に立つ。

「だいじょうぶです。このこはわたしのじゅうまです」

一人前に出ている大きいお兄さんに向かって、警戒されないようににつこりと営業ス

マイルで笑って見せた。

三 幼子^{おさなご}

私がシルバに手をかけながら話している様子を見て、お兄さんは手をすっと上げ合図をする。それに合わせて、周りの人達が武器を下ろした。

まだ警戒気味だが、皆お兄さんの後ろに集まり、じつとこちらを窺^{うかが}っている。

「そちらに少し近づいてもいいか？」

お兄さんが聞いてくるので、私はシルバに大人しくおすわりをさせる。

途端に「おおっ！」と、武装した人達がどよめいた。

【ミヅキに危険があれば構わず殺^やるぞ】

シルバがサラッと怖いことを言う。

「わたしにきがいにくわえなければ、だいじょうぶでしゅっ」

【あ、囁^{ささや}んだ……】

すると、先程より皆のヒソヒソ声が大きくなった。数人はブルブル震えている。

恥^はずかしい。そんなに笑わなくてもいいのに……

恥^はずかしさのあまりちよつと目がうるうるしてしまふ。

シルバが小さく唸^{うな}るとピタッとざわめきが止まった。

お札の気持ちを込めて撫^なでながら笑いかけると、またざわつきですが、シルバがキツと睨^{にら}みをさかせる。

「うおっほん。じゃ少し話を聞かせてほしいが大丈夫かな？」

前にいたお兄さんが少し近づき話しかけてきた。よく見るとすっごくいい体格で、まあまあイケメン。三十前くらいかな、と失礼ながらじっくり観察させてもらおう。

じつとお兄さんのことを見つめていると、切れ長の目元が緩み、へらつと相好^{さうごう}が崩れた。あれ？　なんかちよつと残念な見た目になっちゃった。

まあとりあえず話をして町に入りたい。

こくとんと頷くとお兄さんはなぜか頬を染めて、口元を押さえている。後ろでは機嫌が悪くなったのか、シルバがまた小さくグルッと鳴いていた。

「おいしゃん、おはなしいじょうぶですよ」

「ああ、すまなかった。そちらの獣はお前と契約している従魔で間違いないか？」

構わずこちらから話しかけると、彼はチラッと後ろのシルバを見遣る。

「こちらの言ってることを理解できてるようだが……お前、年はいくつだ？」
私は答えに困って、シルバに【助けてー】と視線を送った。

【シルバどうしよう。何才って言えばいいかな？】

【本当の年齢は分からないんだ、素直に分かれないと言っておけ。相手に都合よく解釈してもらおう】

「わかりやない……」

騙^{だま}してることが申し訳なく、俯^{うつむ}き気味に答える。
すると、お兄さんは慌てた様子で返事をした。

「い、いや別に責めているわけではない。受け答えもできるし四、五才くらいだろうが……実は俺達はフェンリルの目撃情報を受けて、ここを調査しに来たんだ。おまえがフェンリルに捕らえられているのかと思い、救出しようとしたんだが……」

「だいじょうぶです。シルバなかよし！ わたしをまもってくれる！」

やっぱり勘違いして私を助けてくれようとしてたんだ。危険はないよって気持ちで込めて、警戒させないように笑ってみせる。

「お、おお、そうか。それで親はどこにいる？」

親？ ああ、幼子^{おこ}だから親^{おとこ}というと思ったのか……

とりあえず分からないとプルプルと横に首を振る。

「きがついたらもりにいたの。シルバがたすけてくれて、ここまでつれてきてくれたの」

「そうか……こんな可愛い幼子^{おこ}を捨てたのか……」

お兄さんがなにか言ったがよく聞こえなかった。見ると、なにやら神秘的な顔をしている。やっぱりこんな怪しい子供は町には入れたくないよね……このまま誤魔^{ごま}化^かして立ち去ったほうがいいかな。

「お前さえよければ町に来るか？ 独り立ちできるまで面倒を見てやるぞ」

落ち込んでいたら、唐突にお兄さんがそんなことを提案してきた。他の人達が血相を変えて彼に詰め寄っている。

勝手なことを言い出したお兄さんを責めているのだろう。

不安になってシルバを見上げる。

なぜかシルバは満足げにふふんと鼻で笑っていた。

【やっぱりミヅキは可愛いからな】

なんなんだ？ と首を傾げていると、お兄さん達の話し合いも終わったようだ。

「話合った結果、俺が責任をもってお前の面倒を見てやることになった！ 俺はベイカード。よろしくな」

お兄さんの名前はベイカーさんというらしい。

「わ、わたしはミヅキです。ほんとにいいですか？」

ペコッと頭を下げて、迷惑じゃないかなあと、眉尻を下げてベイカーさんを見上げた。ベイカーさんはそんな私を見て、また口元を押さえて横を向いてしまった。ああ、やっぱり迷惑だったんだ……

悲しくなり、目の奥がツンとして泣きそうになる。

「あ、あすまんっ。違うんだ！ ミヅキはまだ子供なんだから大人を頼っていいんだぞ」
あわあわと言うベイカーさんの後ろで、他の人達もうんうんと頷いている。

「ありがとうございます……」

優しい人達に会えてよかった……ほっとして目に涙を溜めながらお礼を言った。ベイカーさんがそつと頭を撫でながら優しく笑いかけてくれる。

「グウルル」

シルバが低く唸りながらベイカーさんを押しのける。ベイカーさんは急に出てきたシルバに驚いて、ビクッと手を引つ込めてしまった。

「シルバ、メッよ！」

シルバの失礼な態度を注意すると、彼はシュンと耳を下げる。

そんな私達のやり取りを見て、ベイカーさんはニカツと爽やかに笑って褒めてくれる。
「本当に従魔なんだな！ 幼いのに凄い才能だ。テイマーとして十分食べて行けると思うぞ。じゃあ、とりあえず町に向かいながら少し話をしよう」

ベイカーさんは他の人達を先に帰らせ、このことを報告するように指示を出す。そしてこちらに向き直り、頬を持ち上げ微笑んだ。

「これから町に着いたらまず冒険者ギルドに行ってもらおう。そこでミヅキは冒険者として登録するが問題ないか？」

「ぼうけんしゃってなにをすればいいの？」

「冒険者のやることはピンキリだ。一番簡単なものだと薬草集めとかだな。それならミヅキにもできるだろう。とりあえず登録して身元を証明するものを作らないと、町に滞在することができないからな」

ふんふんと頷きながら聞いていると、ベイカーさんが嬉しそうに話を話してくれる。
「別に冒険者になれてことじゃないから安心しろ、大きくなったら好きなことをすればいい」

そう言いながら頭をぼんぼんっと優しく撫でる。

「じゃ行くか！ ちょっと遠いから抱っこしてやろうか？」

ベイカーさんが手を差し出してくれるが、

【ミヅキ乗れ】

シルバが顔を近づけたので、反射的にギュッと抱きつく。そしてポンッと背に寄せられた。

「シルバがはこんでくれるからへいきー」

ニカッと笑うと、ベイカーさんは「そ、そうか……」と肩を落として歩き出した。

シルバはその後ろを悠々とついていく。私はそんなベイカーさんの様子には気付かずシルバの毛並みを堪能していた。

町に着くと門番はすでに報告を受けていたのか、ベイカーさんと挨拶をした後、すんなり通してくれた。

シルバを見てびっくりしていたが、幼子^{おさない}が背に乗っていることで従魔と認識したようだ。

町に入りしばらく歩いていくと、民家とは違う大きな建物が見えてきた。

「あれが冒険者ギルドだ。門からの道順は覚えたか？」

ベイカーさんがギルドの建物を指差しながら聞いてくる。

その時になってやっと、周りの建物が気になってキョロキョロしていて、道順など覚えていなかったことに気が付いた。

【俺が覚えているから大丈夫だ】

シルバがこちらをチラッと見た。

なんてできる子！ さすがイケメンフェンリル！

「シルバがおぼえたー」

うちの子凄いだろって親馬鹿な感じで胸を張る。

「もしかして……フェンリルと意思疎通がとれるのか？」

ベイカーさんがびっくりしたからおしゃべりできるよー

「じゅうまのけいやくをしたからおしゃべりできるよー」

どんな人でも従魔と契約したら会話ができると思い、軽い気持ちでそう言っていると、ベイカーさんは呆然としてしまった。

あれ？ どうしたのだろう。

シルバにベイカーさんのそばまで行ってもらい、つんつんと突いてみると、彼はハッと覚醒した。

「いや……従魔の契約をしても獣が喋れなければ会話はできんだらう。つまりそのフェ

ンリルは言葉が理解できるほど知能が高いんだな……」

ベイカーさんがブツブツ呟いているが、今は目の前のギルドに意識が行く。ギルドの中に入ると、視線が集中した気がした。

不安になり思わずシルバの毛をギュッと握る。

ベイカーさんはそんな視線など気にせずどんどん奥に進んでいき、窓口みたいなところに座っているお姉さんに話しかけている。

こっちに来いと手招きをされたので、シルバから下りてベイカーさんに近づいた。

「ここで登録をするんだ。台に届かないから持ち上げるぞ」

そう言われて、ひょいと抱きかえられた。

「じゃあ、こいつの登録をお願いする。名前はミヅキ、年はまあ四、いや五才で、職業はテイマー。従魔は後ろのフェンリルだ」

ベイカーさんの言葉をお姉さんが紙にサラサラと書いていく。その紙を持って奥の扉に入っていくと、しばらくして一枚のカードを手に出してきた。

「こちらのカードに血を一滴お願いします」

お姉さんがカードを出しながらにつこり笑って言うてくる。

血……えつとどうやるんだ？

やり方が分からずにチラッとベイカーさんを見上げた。

「ナイフとかで指先をちよつと刺して出したりするんだが……大丈夫か？」

彼は心配そうに聞いてくる。そのくらいなら大丈夫だと思い、指を差し出した。

「俺がやるのか!？」

自分が刺すなど思いもよらなかったのか、びっくりしている。でも、ちよつとこの小さい手でナイフを持つ自信はないしお願いしよう。

「おねがい」と上目遣いで目を潤ませる。我ながらあざとい。うん、すみません。

ベイカーさんが悶えながらなにやら葛藤している。縫るようにチラッとシルバのほうを見ると、パイッと顔を逸らされていた。お前がやれって感じだね。その後、お姉さんを見るけど……

「嫌です」

ハッキリと断られた。まあ、幼子おとなの手にナイフ刺すのなんて流石にやだよー。

「ベイカーさん、おねがいします。いたくてもへいきだから」

につこり笑って指を更に差し出すと、ベイカーさんが渋々ナイフを取り出した。

「フレイシア、回復薬を用意してくれ」

ベイカーさんが受付のお姉さんに指示する。すかさずお姉さんは笑みを浮かべたまま、

小さな瓶を見せた。すでに用意しているとはできるお姉さんだ。

ベイカーさんは、私の手を握るとゴクツと唾を呑む。

えっ、そんなに覚悟がいるの……どうしよう、ちよつと不安になってきた。

ベイカーさんの緊張が私にまで移る。そして、彼の右手が動いたと思ったら、指先にピリッと小さな痛みが走った。

「は、早くしろ！」

ベイカーさんが慌てた顔でフレイシアさんに私の指を差し出す。フレイシアさんに手を取られ、指の先を軽く押されてカードの上に血を垂らした。カードに血がスーッと染みていく。

彼女が指先に用意していた瓶の液体を少しかけると、みるみるうちに傷が塞がった。

「ありがとうございます」

「いい子ね。よく頑張りました」

フレイシアさんにお礼を言ったら、優しく頭を撫でてくれた。こちらの人は頭を撫でるのが好きだなあ、なんて考えていると、ベイカーさんが傷の具合を確認してくる。

「傷痕、残ってないよな……」

じーっと指を見ている。別に指先に痕が残ったって気にしないのに。

【ミヅキ、指先を見せろ】

シルバまで傷痕を見たいと言い出した。ベイカーさんに言ってシルバのそばまで行き、指を差し出すとペロペロと指を舐められた……なんで？

「では、こちらがミヅキ様のギルドカードになります。身元確認の際に必要になりますので、なくさないようお願いします。ギルドのシステムについて説明いたしますか？」

「あーそこら辺は俺が説明しておくから大丈夫だ」

フレイシアさんの問いに、ベイカーさんは首を横に振る。

「了解です。あと、ギルドマスターに会っていかれますか？」

「ミヅキも今日は疲れていると思うから、明日改めて顔を出すと言っておいでくれ」

「はい。それと、従魔に装身具をつけていただきたいのですが」

フレイシアさんは頷いた後、申し訳なさそうにシルバを見た。シルバはあからさまに嫌そうな顔になる。

どんな装身具をつけるのか聞くと色んな形がありなんでも大丈夫とのこと。

見せてもらうため、さっそくテーブルに並べてもらった。

首輪に腕輪、アンクレット、イヤリング、ネックレスと種類も大きさも様々だ。

【シルバはどれがいい？ それともつけるのはやっぱり嫌？】

シルバの顔を覗くと、じつとなにかを見ている。
目線の先には赤い首輪があった。その首輪は愛犬の銀がつけていた首輪によく似ていた。

銀を思い出しながらそっと手に取る。銀なら首輪で丁度いいが、シルバは脚につけることになりそうだ。

【シルバ、これどうかな？】

【俺には小さそうだな】

【シルバがつけるなら脚にだね。それとも違うのがいい？ 嫌なら無理してつけなくてもいいんだよ】

【ミヅキのためなら大丈夫だ】

シルバはペロツと頬を舐めて、前脚を差し出した。私は手にしていた赤い首輪をシルバの脚につける。首輪はフワツと淡く光り、シルバの脚にフィットした。

【大丈夫？ 邪魔じゃない？】

【いや平気だ。不思議と違和感がない】

【黒い毛並みにとっても似合ってるよ】

シルバは満足そうに首輪——もとい腕輪を見ている。嫌がってなくてよかった。

「じゃあ行くか」

ベイカーさんは、無事に装身具をつけ終えるのを確認すると出口に向かった。私度も一度フレイシアさんにお礼を言って、ベイカーさんの後についていく。

「俺の家までまだ少し歩くから、フエンリルに乗せてもらえ」

扉の外で待っていてくれたベイカーさんは、そう言ってシルバの背に乗せてくれる。そして再び歩き進めること十数分、町の外れに佇むちよつとおんぼろの小屋が見えてきた。

もしかして、あれ……？

ベイカーさんは案の定その家に入る。

「ライト」

家に入るなり、ベイカーさんがそう唱えた。すると、瞬く間に部屋の中が明るくなる。

「しゅごーい」

これも魔法だよね！ 感激してベイカーさんを見上げた。

「ライトの魔法が珍しいのか？ 誰でも使える生活魔法だぞ」

「まほう。わたしにもつかえる？」

是非とも使ってみたいが、どうやらできるのだろう。

「魔力があればできるはずだ。ステータスは見たことあるか？」
ステータス？ そんなものが見られるの？ なんて考えていると、目の前に透明のパネルのようなものが現れた。

《名前》 ミヅキ
《職業》 テイマー
《レベル》 1
《体力》 50
《魔力》 10000
《スキル》 回復魔法 水魔法 火魔法 土魔法 風魔法
《従魔》 シルバ（フェンリル）
《備考》 愛し子 転生者 鑑定 ??? ? ? ?

おお！ なんか出た！
なんか色々気になることがあるが……とりあえず魔力がある。魔法が使えそうだ！
「すてーたすでた！ まりよくあるからまほーできる？」

首を傾げて聞くと、ベイカーさんはヘラツと笑った後に、ギョツとした顔になる。表情が忙しいなあ……

「なっ、なんて言った？ ステータスが出た？」
なんか慌てている。うんと頷くと、彼は今度は頭を抱えだした。

「あのなあ……普通ステータスは自分では見えない。神官が鑑定をして確認するものなんだ」

「かんでーある」
ステータスに書いてあったもん。

「そ、そうか……じゃちよつと俺を鑑定してみろ」
ベイカーさんを見ながら（鑑定）と強く念じる。

《名前》 ベイカー
《職業》 A級冒険者 剣士
《レベル》 89
《体力》 3682
《魔力》 2539

《スキル》火魔法 風魔法 剣技

——これより表示できません——

「ベイカーさん、えーきゅーばうけんしゃってでてます。れべる89！すごいです」
でも、スキルの後が表示できないと出ている。

「なんか、すぎるまでしかみられません」

見た通り伝えるとベイカーさんが目元を手のひらで覆い、天井を仰ぐ。

「あ……………うん。本当に鑑定があるんだな。表示されないところは隠匿いんとくしてあるんだ。見られるとまずい項目なんかは隠す奴が多いぞ、ミツキも隠匿いんとくしたほうがよさそうだな」
この様子だと備考の部分は全部見せたらまずそうだな。

転生者って書いてあるし……………その前に愛いとし子なんてのもある。

そんなのバレたら……………面倒くさそう、どうせなら私のことは、ほつといてほしい
なあ……………

「まあ、魔法やら鑑定のことはとりあえず明日ゆつくり聞く。今日はもう疲れただろうから休め」

そのまま奥の部屋に連れて行かれる。奥は寝室になっているようで、ベッドが一つと

小さい棚が置いてあるシンプルな部屋だ。

「少し汚いが我慢してくれ」

野宿するつもりでいたからベッドで寝られるだけ全然でした。しかしベッドが一つしかないとなると、ベイカーさんの寝るところが気になる。

「ベイカーさんは？」

「俺はあっちのソファァで寝るから大丈夫だ」

そんな大きな体でソファァに……………どう考えても小さい私がソファァで寝るべきだ。

「わたしがあっちでいいよ」

ソファァを指差してベイカーさんを見上げたが、子供が遠慮すると言われ、結局ベッドに寝かされる。大きな手で頭を撫なでられると疲れていたのか瞼まぶたが重くなる。

【シ……………ルバ……………】

薄れる意識の中、手を伸ばしシルバを呼ぶと、シルバのふわふわの毛が触れた。そのぬくもりに安心して、私はそのまま意識を手放してしまった。